



TITLE:

<Book Review>Pisanu
Intrakomhaeng. Thai for Foreigners.
Bangkok, 1968, iv+327p.

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

CITATION:

桂, 満希郎. <Book Review>Pisanu Intrakomhaeng. Thai for Foreigners. Bangkok, 1968, iv+327p.. 東南アジア研究 1969, 7(1): 108-108

ISSUE DATE:

1969-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55554>

RIGHT:

ような文を記録するのはたいして困難ではないが、同じ意味でも、〈a, za, za, shi, shi-eu〉《豚が豚の死を死ぬ》といったような例を記録するのはなみたいていのことではないのである。

本書およびその他のタイプのアカ語については、後により詳しく述べるであろう。

(桂 満希郎)

Pisanu Intrakomhaeng. *Thai for Foreigners*. Bangkok, 1968. (個人出版) iv+327 pp.

タイ語の優れた入門書に対する要望が高まりつつある折から本書が出版されたことは、また一つの喜びとせねばならない。まず本書の構成を見ると、“Phonology” “Morphology” “Key to the Tones”の項目の下にそれぞれ概略的な説明がなされ、ついで34課から成る本文であるが、第16課の後には“Syntax”，第34課の後には“Orthography”の説明があり、これだけが“Part I”となっている。“Part II”は合計33課あり、すべて絵を使つての“Pattern Drills”である。“Phonology”は根本的には Haas のそれと変わらないが、異なる点は Haas の /j, y, ua, ia, ya/ がそれぞれ /y, i, uə, iə, iə/ と表記されていることのみである。例えば /rə/ 《(疑問)》, /khám/ 《彼》などのように、文字にとらわれずに、実際に話されている通りを表記している点は非常にすぐれているが、その反面、音素と文字との混同が見られるのは解せない。例えば 〈bhala〉は /phon/ であるが、文字にとらわれて /phol/ と表記するなどである。それならば 〈kaara〉は /kaan/ ではなく /kaar/ としななければならないのではないか。“Morphology”はごく簡単で、“Prefixes, Infixes, Suffixes”があげられているだけである。後2者については問題ないとして、“Prefixes”において、/fák, lûuk, kaan, khwaam/ が /pra-~pa-, kra-~ka-/ などと同列に扱われていることは、大いに疑問を感ずる。声調は本書の説明で充分であるが、実際に教室で使用するとなると、別に練習用のシートを使って補足し

なければならないだろう。第1課→第34課は“Dialogue” “Notes” “Pattern Drills” から成るが、量は他の本にくらべて少なく、教室で使つた場合は2時間で終了すべきである。“Part I” “Part II”を合わせて67課あるから、1週に10時間(1日2時間で5日)とすると、だいたい14週間(3カ月半)で本書を仕上げることができる。内容から見て、日常の用を足すに不自由しない程度の基礎的な文しか出てこないから、本書にこれ以上の時間をかけるのは適当ではないが、短期間にタイ語の基礎的な語彙と構文とをのみこむには向いているであろう。本書の構文はすべて、Transformational (=Generative) Grammar にもとづいたもので、少ないスペース内に、かなり能率よく必要な構文や造語法を網羅しているが、初心者あるいは言語学の予備知識のない人達にとっては、変形文法の用語や等式の類をあまりにも強く打ち出しすぎており、むしろ奇異な感をいだかせるかもしれない。“Syntax”はすべて上記変形文法により説明され、英語と対照されていて、よく出来ていると思うのであるが、変形文法を心得た教師により説明されなければ、本書の価値を充分に利用することができないであろう。欠点としては、(1)語彙がかなり高度なものを含むにもかかわらず、構文はあまり程度の高いものではないこと、(2)ミスプリントの多いこと、(3)1冊にあまりいろいろなことを押し込みすぎたこと、(4)各課の量が不釣りあいであることなどがあげられよう。他の本である程度習ってきた人が、知識なり理解なりをさらに確かなものとし、タイ語の文法を把握するために、本書を課外用に使用するほうが適当であろう。次に、タイ語を実用的に学習しようとする人以外に、言語学的にタイ語の文法構造を記述しようとする人にとっても本書は役に立つと同時に、興味を引くものとなっている。変形文法の立場から、タイ語を分析した本はほとんどないと言っていいほどであるが、本書に示された P(hrase) S(tructure) Rules および T(ransformation) Rules を詳細に検討することにより、著者のタイ語に対する記述方法をかなり知ることができる。なお、“Thai for Foreigners”は「Thai for Foreigners whose mother tongue is English」の意であることをつけ加えておく。

(桂 満希郎)